

入谷仙介 高啓  
岩波書店 中国詩人選集

書名：中國詩人選集 二集  
頁碼：1~13  
作者：高啓 著 / 入谷仙介 注  
出版者：岩波書店 (東京)  
出版時間：1962

青邱子歌

江上有青邱、予徙家其南、  
因自號青邱子、閒居無事、  
終日苦吟、閒作青邱子歌、  
言其意、以解詩淫之嘲。

青邱子の歌

江上に青邱有り、予徙りて其の南に家し、  
因りて自ずから青邱子と号す、閒居無事、  
終日苦吟し、閒に青邱子の歌を作りて、  
其の意を言い、以て詩淫の嘲りを解く。

○青邱子歌 青邱は蘇州郊外呉淞江岸の地名。高啓の妻がこの地の豪家周子遹の娘であった關係から、高啓はここに  
住んでいたことが多かった。実際に丘があったからの地名のようである。至正十八年、はじめて青邱子と号した時の  
作である。この詩は森鷗外が訳して「水滸集」に収めている。近代的文学観により見直された中国古典詩のもっとも  
早いものとして有名である。  
○江上 吳淞江のほとり。高啓の詩で江上という時は青邱をさすことが多い。○詩淫 淫は過度にふけること。詩淫  
は詩きちがい。

川の岸べに青い丘がある。私はその南側にひっこして住み、土地にちなんで自分で青邱子という号をつ  
けた。わび住居で仕事もなく、一日中詩を苦吟し、そのあいまに「青邱子の歌」を作って、自分の心持を  
いい、それによって詩きちがいと笑われるのに対するいいわけとする。

青邱子

躍而清

本是五雲閣下之仙卿

何年降謫在世間

向人下道姓與名

躡屩厭遠遊

荷鋤懶躬耕

有劍任鏽澀

不肯折腰爲五斗米

不肯掉舌下七十城

但好覓詩句

自吟自酬賡

田間曳杖復帶索

傍人不識笑且輕

青邱子  
躍せて清し

本と是れ 五雲閣下の仙卿なり

何の年にか降謫されて世間に在るや

人に向かいて姓と名とを道わす

屩を躡むも遠遊を厭い

鋤を荷うも躬耕に懶し

劍有るも鏽澀するに任せ

書有るも縦横なるに任す

腰を折りて五斗米が爲にするを肯んぜず

舌を掉いて七十城を下すを肯んぜず

但だ好みて詩句を覓め

自ずから吟じ 自ずから酬賡す

田間に杖を曳き 復た索を帯とするを

傍人 識らず 笑ひ且た軽んず

謂是魯迂儒

楚狂生

青邱子聞之不介意

吟聲出吻不絶啾啾鳴

朝吟忘其飢

暮吟散不平

當其苦吟時

兀兀如被醒

頭髮不暇櫛

家事不及營

兒啼不知憐

客至不果迎

不憂回也空

不慕猗氏盈

不慙被寬褐

謂えらく 是れは魯の迂儒ぞ

楚の狂生ぞと

青邱子 之を聞くも意に介せず

吟聲 吻を出で 啾啾として鳴るを絶たず

朝に吟ずれば其の飢を忘れ

暮に吟ずれば不平を散す

其の苦吟の時に当りては

兀兀として醒を被るが如し

頭髮も櫛けずるに暇あらず

家事も營むに及ばず

兒啼くも憐むを知らず

客至るも迎うるを果たさず

回也の空しきを憂えず

不慕猗氏の盈なるを慕わず

不慙被るを慙じず

不羨垂華纓  
不問龍虎苦戰鬥  
不管烏兔忙奔傾  
向水際獨坐  
林中獨行  
斲元氣  
搜元精  
造化萬物難隱情  
冥茫八極遊心兵  
坐令無象作有聲  
微如破懸蟲  
壯若屠長鯨  
清同吸沆瀣  
險比排崢嶸  
靄靄晴雲披

華纓を垂るるを羨まざる  
龍虎の苦しみて戰鬥するを問わず  
烏兔の忙しく奔傾するに管せず  
水際に向かいて独り坐し  
林中に独り行く  
元氣を斲り  
元精を搜り  
造化 万物 情を隠し難し  
冥茫たる八極 心兵を遊ばせ  
坐るに無象をして有聲と作らしむ  
微なるは懸けし蟲を破るが如く  
壯なるは長なる鯨を屠るが若し  
清なるは沆瀣を吸うに同じく  
険なるは崢嶸を排くに比ぶ  
靄靄として晴雲披き

軋軋凍草萌  
高攀天根探月窟  
犀照牛渚萬怪呈  
妙意俄同鬼神會  
佳景每與江山爭  
星虹助光氣  
煙霧滋華英  
聽音諧韶樂  
咀味得大羹  
世間無物爲我娛  
自出金石相轟鏗  
江邊茅屋風雨晴  
閉門睡足詩初成  
叩壺自高歌  
不顧俗耳驚

軋軋として凍草萌ゆ  
高く天根を攀じて 月窟を探り  
犀は牛渚を照らして 万怪呈る  
妙意 俄に鬼神と同じく會し  
佳景 毎に江山と争う  
星虹 光氣を助け  
煙霧 華英を滋す  
音を聴けば韶樂に諧い  
味を咀えば大羹を得たり  
世間に物として我が娛しみを爲す無し  
自ずから金石を出だして 相い轟鏗す  
江邊の茅屋に風雨晴れ  
門を閉ざし 睡り足り 詩初めて成る  
壺を叩きて自ずから高歌し  
俗耳の驚くを顧みず

欲呼君山老父攜諸仙所弄之長笛

和我此歌吹月明

但愁歎忽波浪起

鳥獸駭叫山搖崩

天帝聞之怒

下遣白鶴迎

不容在世作狡獪

復結飛珮還瑤京

君山の老父を呼びて諸仙の弄する所の長笛を携さえしめ  
我が此の歌に和して月明に吹かしめんと欲す

但だ愁うるは歎忽として波浪起り

鳥獸 駭き叫び 山の揺れ崩るるを

天帝 之を聞きて怒り

白鶴を下し遣わして迎えしめん

世に在りて狡獪を作すを容さず

復た飛珮を結びて瑤京に還らん

○臆 やせている。○五雲閣 天上の建物。五色の雲のたなびいている高殿。他に用例を知らず、高啓の想像による造語のようである。○仙卿 天帝に仕える役人。道教では人が修業して仙人になると、天に上って仙卿になると信じられていた。逆に天上の仙卿も罪を犯すと下界へ流されて人間に生れ変わる。しかし期限が来るとまた天上へ帰ると信じられては官吏が地位をさげられる。譎は地方へ追放される。この場合天上の仙人が下界へ流されることである。○降譎 降は官吏が地位をさげられる。譎は麻ぐつ。○荷 になう。○劍・書 劍と書物とは知識人の表道具である。○鑑澀 鑑はさび。澀はなめらかでないこと。さびができること鉄の表面はなめらかさを失うからこういう。○縦横 秩序のない状態。本がたてよこに乱雑に置かれているのである。○不肯折腰句 不肯は承知しない。折腰は腰を曲げておじぎをす

る。五斗米はわずかな給料。わずかな給料のため人に腰を曲げておじぎするようなまねはしたくない。晋の詩人陶淵明が彭沢県の令(長官)になった時に上官が視察に来たので、部下が礼服を整えて面会せよと言った所、彼は「わしには五斗米のために腰を折ってうやうやしくくにのちんばらに仕えることはできぬ」といって辞職してしまった。○不肯掉舌句 掉はゆり動かす。掉舌とは弁舌をたくましくすること。下は降服させる。七十城は戦国時代の齊国の町の数。秦漢交替の際の混乱期に一時もとの齊の王族が齊国を復興させていた。漢の高祖おかえの雄弁家の酈食其は、齊王を説得して、齊を漢の従属国にすることに成功した。その時すでに齊国討伐に向かっていた韓信の軍隊は、酈食其にあざむかれる結果となったことを怒って彼を殺した。この詩の作られた時代は漢初にも劣らぬ乱世であったから、一たんの功名が酈食其のようにかえって身のわざわいとなる危険があった。○覓 さがし求める。追求する。○酬展 酬も展もある詩に合わせて別の詩を作ること。交際的手段として他人の詩に合わせるのがふつうだが、ここは自分の作品に自分で合わせる。一人作詩を楽しむことを言う。○帶索 「列子」天瑞篇に見える宋啓期の話。彼はなわを帯の代りにするほどな極度の貧困の中で、なお生活を楽しんだ有徳の隠者である。○旁人 まわりの人。他人。○魯迂儒 魯は山東省曲阜を中心とする春秋時代の国。孔子の出身地。国が亡んでも後漢代までなく儒家学派の中心であった。迂は現実の役に立たぬこと。魯の儒者たちには、特に漢初のごころ、包圍された城中でゼミナールを続けたり、漢の高祖が国家の儀式を定めるために儒者の召集を行ったのに応じないのがいたりして、現実を無視した理想主義的な行動が多かった。○楚狂生 楚は春秋から戦国前八世紀―前三世紀にかけて湖北省を中心に華中一帯に勢力をふるった国。狂とは理想を求めるに急なあまり、行動が過激に走る人物をいう。孔子が楚に行ったとき、接輿という狂者が孔子の車のそばを「鳳凰(孔子にたとえる)よ、なんと徳のおとろえたことか。過ぎ去ったものは仕方がない。これから先のことはまだ取返しがつく。やめておけ、やめておけ、今の政治に従う者は危険だよ。」と歌いながら通りすぎた。孔子は車を下りて追いかけたが、もう姿が見えなかった。「論語」微子篇に見える。○吻 ちくちくする。○啣 口ずさんでいる形容。○无兀 意識を超越した状態。○醒 酒に悪酔いする。○憐 かわれる。○回也空回 孔子の高弟顔回。その米びつがしばしば空っぽになるほどの貧乏ぶりで有名である。「論語」雍也篇に「回也空

ば空し。」という。○猗氏盈 猗氏は猗頓いとう。古代の伝説的富豪。盈は倉に一ぱい物のつまっていること。豊富、充滿。○寛福 だぶだぶした粗末な毛皮。貧乏人の着物。○華縷 縷は冠を結ぶひも。華縷は貴人の美しい縷。○不問句 竜虎は水中の強者と陸上の強者。竜虎の戦は強力な者同志が全力をあげて勝敗を争うこと。当時は宋元璋、明の太祖以下、張士誠、陳友諒、韓林兒、明玉珍、方国珍らの群雄が華中に割拠してたがい烈しく争っていたが、そうした国内情勢には無関心に。○不管句 不管は関心をはらわない。烏鬼は日の中の鳥と月の中の鬼。つまり日月。奔傾断は切る。元氣は宇宙の根源的なスピリット。それを切りとって我がものにする。○搜元精 搜はさがし出す。元精は元氣と同じ。○造化句 造化は物を造り化するもの。自然。詩人が自然界の根源的な精をさがし求め、万物が自分の中にそれぞれかくしている秘密をあばきだして歌い上げるのである。○冥茫句 冥茫は無限の広大さを形容する語。八極は宇宙の八方の果て。心兵は心の刃。韓愈の「秋懷」十一首に「冥茫として心兵に触る」(清水茂「韓愈」六句)とある。詩人が詩を求めてその精神を世界の無限の果てまで飛びまわらせることを言うのである。○坐令 坐は物事が意識せずにいつのまにかできあがる場合に用いる助字。象は具体的に認識できるもの。具体的には認識できない宇宙万物の精神を具体的な音声とせよと表現するのが詩人の使命である。○微如句 蝨はしと教えた。彼はしらみを牛の尾の毛でしばって窓のそばにぶらさげ、三年間にらみ続けた。そのうちにしらみに大きくなった。中島敦はこの物語を題材とした小説「名人伝」がある。以下十四句は高啓自身がその詩の多様な内容をさまざまに形容している。○長鯨 鯨は海中の怪物として恐怖の対象となっている。○沈壺句 天上の露。それを吸うのは仙人。○險比句 険は平凡であったり常識的であったりしないこと。比はなにかと同様である。排はおしける。蟬噪は山のけわしくそびえたつ形容。こはそびえ立つ山。○蠶蠶 雲がやわらかに光りながら集まっている状態を形容する語。○披 ひろがる。○車軋 物が群がって発生するのを形容する語。○天根 大地の別名。晋の楊泉の「物理論」に「地は天の根本なり。」といい、宋の邵雍の「觀物詩」に「月窟を探るに因りて方に物を知り、未だ天根を躡ま

ざるに豈に人を知らんや。乾の巽に遇いし時は月窟と為し、地の雷に逢いし処に天根を見る。」とある。また天根という星もあり、氐宿という星座の別名だといふ。○月窟 月中というのに同じ。○犀照句 牛渚は牛渚山。揚子江岸の地名。安徽省東部にある。その淵は底なしの深さでその中に怪物がたくさん住んでいるといわれる。東晋の名臣の温嶠が蘇峻の反乱を平定して、南京から任地の武昌へ帰る途中に牛渚を通りかかり、その話を聞いて犀の角をたいまつにして照らしてみると、果たして多くのふしぎな姿のものが居た。「晋書」温嶠伝に見える。○俄 時間のきわめて短いこと。○鬼神 超自然的な精霊。わが国のいわゆる鬼神のように恐怖の対象となるものでは必ずしもない。○佳景句 その詩にあらわれた叙景のすばらしさは、自然の風景そのものと優劣を争うのである。○煙霧句 煙霧はもやと霧。滋はうるおして成長させる。華英は花。英も花である。○諧韶樂 韶は調和する。韶樂は太古の理想的君主舜帝の音楽。もっとも完全な音楽とされる。○咀 口でかんで味をあじわう。○大羹 味つけをしない肉のスープ。「礼記」の礼器篇に「大圭琢せず、大羹和せず。」という。もっとも自然な味であるから最高の美味とされるのである。○金石 金は鐘。石は磬(石製の打楽器)。音楽の総称。ただしここではもちろん詩の言葉である。孔子の弟子の原憲が商頌(春秋時代の宋国の祭祀用の詩。「詩経」に収められている)を歌うと、その声は天地にひろがって鐘か磬のひびきのようにであった。「韓詩外伝」に見える。○轟鏗 音の烈しいこと。疊韻の語。疊韻は同じ母音の字を重ねる修辭法。○叩壺 「世説新語」豪爽篇に、王敦がたんづばをたたいて魏の曹操の樂府を歌ったことが見える。○君山老父 君山は洞庭湖畔にある山。呂郷筠という笛の好きな商人が洞庭を旅して君山のふもとで船がかりをしていると、一人の老人が彼の吹く笛の音を聞いて小舟をこぎ寄せ、「わしは笛吹きだが、お前に教えてやろう。」といい、懐中から三本の笛を出し、「一ばん大きいのは天帝の御前で吹くためのもので、人間界で吹くと世界が崩壊してしまふ。そのつぎのは仙人や神神のために吹くもので、人間界で吹くと大災害が起る。一ばん小さいのはわしが仲間と楽しむために吹くもので、人間界で吹くと不安を引き起こす。」といつて一ばん小さい笛を吹き出した。すると湖に風波が起つて大きくなった。そこで老人は笛を止めて酒のみ、舟をこぎ出して姿を消した。「太平広記」に引く「博異志」に見える。○歎忽 非常に早い時間を形容する語。○狡獪 わるがしこい。後漢代に呉に住んでいた蔡經という人の所へ仙人王遠と女仙麻姑とが出現したことがあった。麻姑が家の女たちと面会しようとしたが、その中にお座を

したばかりの者がいた。麻姑が汚れをはらうといって米をすこし取り寄せてふりかけると、地に落ちた米はみな丹砂（水銀化合物。錬金術の主要な原料。また不老不死の薬と信じられていた）になった。王遣は笑って「あなたはまだ若い。私はもう年を取ってそんな狡猾な手品はしたくないよ。」と言った。高啓にはこの話を題材にした「蔡經宅」という詩もある。○飛珮 珮は帯につける飾り。飛珮は仙人のそれ。仙人は空を飛ぶ。○瑤京 天上の都。天帝の住む所。

青邱の男。清らかにやせた姿。前身は五雲閣のあたりに仕えた仙人だが、いつの年に人間界に流罪となつたか。他人には氏も名も教えない。麻靴をはいても遠く旅することは好まず、すきをかつげば自分でたがやすのをめんどろがる。劍は持ってもさびるにまかせ、書物は持ってもちらかしほうだい。五斗の給料のために腰をまげるのもいやなら、七十城を降参させるために雄弁をふるうのもごめんだ。ただ好きなのは詩の句をさがすこと。自作を吟じてはまた自分でそれに合わせて作る。田の畔に杖をひいてなわの帯をしめていと、まわりの連中は彼の価値を知らないで、笑ひまたあざける。きゃつは魯のくされ儒者じゃ。楚の気がいじやといひはやす。青邱の男はそれを聞いても心にとめず、くちびるから出る吟声はずずやかにひびくの絶やさない。朝吟ずると腹のへったのを忘れ、夕ぐれに吟ずると心のうさが晴れる。苦吟のまっ最中には、酒に悪酔いしてぐでんぐでんになったようだ。髪にくしを入れるひまもなく、家の仕事もほったらかし。子供が泣いてもあやしてやることに気がつかず、お客が来てもらうくすっぽ出むかえぬ。顔回の貧しさも気にしないし、猗頓の富もうらやましくない。だぶだぶの毛皮の着物を着るのも恥ずかしくなければ、冠からはなやかな飾りひもをたらした人にもあこがれぬ。英雄豪傑が一生けんめい竜虎の争いをしていられるのも知らん顔、日のからず、月のうさがあわただしくかけぐるのも問題に

しない。水辺に一人坐り、林の中を一人さまよい、宇宙の根源をけずりと、自然の本質をさがし求める。彼の前に天地万物はその秘められた姿を明かすのだ。彼は果て知らぬ大空のすみずみまで心の刃を飛ばし、そのまま無形の精神を音声に変えるのだ。

彼の詩の微細なことを詠じたものはつるされたしらみ、射ぬくほどであり、壮大なものは巨大なくじら、を退治するがごとくである。清らかなものは天上の露を吸うかのようなおもむきがあり、常識を破ったものにはそそりたつ山をおしのける勢がある。きらきらと晴れた空の雲が開くようなものあれば、ぎしぎしといつていた草が芽ぶきはじめたようなものもある。時には高く天の根によじのぼったり、月世界を探険するかと思えば、時には犀のたいまつで牛渚の淵を照らしてくさぐさの怪物を見あらわす。すばらしい着想がわき起つてだしぬけに精霊と会合し、うつくしい叙景はいつも山河と競争している。星とじとはその光を助けふやし、もやと霧とはその花びらをぬらしてあざやかさをそえる。そのひびきを聞く詔の音楽に調和しており、その味をあげわうと味つけぬスーパの自然の美味にかなっている。

この世に自分の楽しみとは他にない。みずから鐘や磬ともいうべき吟声を出してはげしくひびきあわせるだけだ。川岸のあばら屋をおそった風雨も晴れ、門をしめきって十分に眠り、やおら詩を完成させる。そこでたんつぽをたたきながらみずから声高く歌い、俗人の耳をおどろかせることにはおかまいなし。君山に出現した老人を呼んで仙人たちがいじくる長笛を持ってこさせ、月明りの夜に自分の此の歌に合わせ吹かせたいと思う。ただ心配なのはあつというまに波がわきたち、鳥けだものがおどろいて鳴きさけび山がゆれ動いてくずれることだ。天帝がそれを聞いて腹を立て、白いつるを迎えに下したまわり、此の世でわるがしく立ちまわるのを容認せず、もう一度空飛ぶ飾り帯をしめさせて、玉の都へ連れ帰るのである。

うから。

山中別寧公歸西塢

一上香臺看落暉  
沙村孤樹晚依微  
老僧不出青山寺  
只有鐘聲送客歸

山中 寧公に別れ西塢に帰る

一たび香臺に上り 落暉を看れば  
沙村 孤樹 晩れて依微たり  
老僧は出でず 青山の寺  
只だ鐘の声のみ有って客の帰るを送る

○山中 虎邱山。この詩の作られた年代は不明だが、おそらく元末の作品であろう。○寧公 下の一字が寧という名の坊さん。金樞の注によると、その人は名を僧暉、字を居中といい、元末の蘇州の名僧。博學で詩も上手で、虎邱山の雲巖寺に居た。虎邱山は蘇州郊外の小さな丘。古來蘇州第一の名勝として、しばしば詩や面の題材となった。公は坊さんの敬称。○西塢 塢は土手で囲まれた場所、多くは単なる地名。青邱をさすかも知れぬ。○香台 寺の建物。○落暉 沈む夕日。暉は日光。○沙村 川岸の河原のあたりの部落。○依微 ぼんやりしていること。暈の形容語である。○老僧句 東晋の名僧慧遠は廬山に住んでいて客を送る場合でも寺の前の虎溪という川を渡らなかつた。たまたま渡ると虎がはえるのが常であった。ある日道士陸修静と詩人陶淵明とが訪れ、話はずんを渡って行く際うっかり虎溪を渡ってしまい、虎の声を聞いて三人大笑いをした。この故事を逆用したものと思われる。ただし陸修静はやや後の時代の人で、この話は真実とは認められていない。○客 高啓自身をさす。

ふと御寺にのぼって夕日をながめますと、河原の村の一本木は夕暮にかすんでおります。老僧はみどりの山のお寺を出ようとはなさいませんが、鐘の声ばかりが御寺を尋ねた私の帰りを送ってくれるのです。

聞舊教坊人歌

渭城歌罷獨淒然  
不及新聲世共憐  
今日岐王賓客盡  
江南誰識李龜年

旧の教坊の人の歌を聞く

渭城 歌罷みて独り淒然たり  
新しき声の世の共べて憐むには及ばず  
今日 岐王の賓客尽き  
江南 誰か李龜年を識らん

○教坊 宮中所属の音楽団。この詩は元の皇室の教坊に属していた歌手を歌う。やはり元末の作と思われる。  
○渭城 長安西方の郊外。王維の「元二の安西に使するを送る」の詩(吉川幸次郎「新唐詩選」一三六ページ。都留春雄「王維」八一ページ)をさす。この詩は「陽關三疊」の別名があり、曲にあわせて歌われた詩として有名である。ここではそのように古風なゆかしい歌。○罷 物事が終ってしまふ。○独 歌い終っても歌が古めかしいので誰もかっさいせず、作者だけが悲しむのである。○淒然 悲痛の思いをすること。○新声 新しい歌。流行歌。○憐 愛する。○今日二句 岐王は唐の玄宗の弟岐王範。風流の皇族として著名であった。賓客は貴人のもとに入りするとりまきの友人たち。江南は揚子江の南の地方。李龜年は唐の玄宗に愛された名歌手。安祿山の乱後は江南を流浪した。この二句は杜甫の詩「江南にて李龜年に逢う」(吉川幸次郎「新唐詩選」一二二ページ。黒川洋一「杜甫」下二〇四ページ)を